

アジア・太平洋研究センター主催，外国語学部アジア学科共 催講演会

日 時：2019年5月16日（木）

場 所：Q棟5階 51, 52会議室

テーマ：頼山陽『日本外史』：世界文学としての漢文

報告者：タック・ロバート（アリゾナ州立大学准教授）



江戸末期の儒者・文人頼山陽（1780-1832）の『日本外史』（以下『外史』とする）は、19世紀の日本において最も広く読まれた文芸的テキストの一つであった。平安時代から戦国時代の終わりにわたる編年史である『外史』では、山陽が漢文で日本歴史上の英傑を上手に描いており、特に19世紀の後半に入って、『外史』が「超」ベストセラーになったのである。よく売れただけではなく、幕末のいわゆる「志士」に愛読された書物として、明治維新のインスピレーションにもなったというほど高く評価される歴史書でもある。

しかし、戦後日本において、戦前の人気とは対照的に『外史』は今や忘れられたテキストであるといわねばならない。戦後の様々な『日本古典文学全集』などには載っておらず、研究の対象になることも少なくなったようである。武士と戦争を積極的に描いている『外史』なので、平和を重視する戦後日本において、『外史』は意識的にカノンから外された可能性がある。

『外史』がこのように戦後さほど注目されていないからこそ、日本文学がどうい

過程で「世界文学」になったかという重要な問題の一局面も見逃されてきたと思われる。日本でこれほど広く読まれた『外史』なので、文明開化時代の明治初期から海外でも流伝して、「日本がわかる本」として外国人学者によって読まれたのも、さほど驚くことではない。本発表では、『外史』が明治の終わりごろまで、イギリス、アメリカ合衆国、フランス、ロシア、それから中国という広い範囲で読まれ翻訳されたケースをいくつか取り上げることにはしたい。結論を先に申すと、『外史』は今現在「世界文学」としてもはやされる、『源氏物語』などという有名な日本文学作品よりも、早い段階から海外へ伝わり、より広く読まれた、というのである。

「世界文学としての日本文学」を考えるにあたって、特に英語圏の国では『源氏物語』を代表作として挙げる傾向が強い。一番早い『源氏物語』の英訳として1882(明治15)年の末松謙著(1855-1920)による部分的な英訳が広く知られており、20世紀に入ってArthur Waleyによる完全な英訳もそれに継いだ。その後現在に至っても、「世界最古の小説」として、『源氏物語』が世界文学の中で日本を代表する作品になったことに異論を唱える者はない。例えば、特に影響力のあるハーバード大学のDavid Damrosch氏の『世界文学とは何か』(2003年)においても、『源氏物語』が世界文学であると主張されている。

しかし、『源氏』より『外史』の方が早かったのである。英語では1871(明治4)年にイギリス人日本学者・外交官Ernest Satow(1843-1929)による『外史』の4巻の英訳が連載され、1873(明治6)年にも、ロンドンのアジア研究学芸雑誌にわずか1ページぐらいではあるが、『外史』第1巻の英訳も出されたのである。その後も、1875年にスイス人学者Francois Turretini(1845-1908)による『外史』の部分的なフランス語訳がフランスやスイスにおいて出版され、1878年から1890年にわたる、馬屋原二郎という長州藩士によるもう一つのフランス語訳が公にされた。

西ヨーロッパのみならず、上記の例とほとんど同時期に、清代の中国人学者が『外史』を読んでいた証拠もある。1875年に広東で『外史』のかぶせ彫りが出版され、1878年と1889年に、序と頭注が付け加えられた『外史』の上海版も作成され、清末期の文人によって比較的広く読まれたようである。もとは漢文なので、中国文人にとっては「翻訳」されずに読めた『外史』が、19世紀の中国において一番広く流伝した日本の文学作品であった可能性が高い。

さらに、1892年に日本に4年滞在したアメリカの牧師William Elliot Griffis(1843-1928)は帰国後、山陽の『外史』を聖書と比べるほど高く評価しており、山陽の文

才を認めて「Rai Sanyo」という文字をボストン市立図書館の壁に彫刻してある世界のすぐれた文人に付け加えた。ロシアにも、軍人・学者である Vasiliy Melentevich Mendrin が日露戦争後、1910年から1915年にかけて『外史』の最初の6巻をロシア語に訳して、ロシアのブラッディボストックの東亜書院の学芸雑誌に連載した。

以上の例が示すように、山陽の『外史』は日本人にとっても外国人学者にとっても、翻訳すべき本、かつ明治日本がわかる本であったといえる。完全な訳がなされていなくても、また海外の学者の間では『外史』自体の文芸的な価値の有無について意見が様々であっても、明治時代にわたって『日本外史』が海外でもっとも広く読まれた日本の文芸作品であったというのに十分な証拠があると思われる。

今では「むずかしい」とけなされる漢文で書かれた書物が日本でベストセラーになり、それから海外でも日本を代表する作品として知られていたという主張は、21世紀の読者を驚かせるかもしれない。しかし、以上を以て、今やほとんど忘れられている、江戸・明治文学のカノンから外された『外史』を再評価する余地があるのではないかと思う。

（文責：タック・ロバート，蔡 毅）